



がん治療革命 「副作用のない 抗がん剤」の誕生

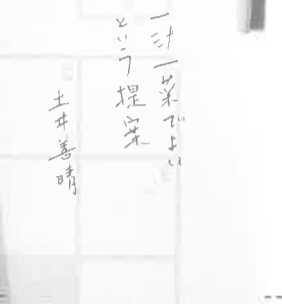
奥野修司著
文藝春秋
本体1500円+税

この抗がん剤が普及すれば、おそらくがん治療に革命が起こる。著者がその表現する抗がん剤「PTHP」について、開発者や治療体験者の声を中心に解説する一冊である。

中には、余命数カ月と宣告された患者が、2年以上経ってもびんびんしているケースも。とはいえ治療方にはまだ不明な点も多いのだが、ほとんど副作用がないため、最期まで「普通の生活」が送れるのが最大のメリットだという。

そんな優れた薬なら、なぜもっと広まらないの？という当然の疑問への回答にも、「あとがき」で触れられている。難解な専門用語も多いけれど、なんとか分かりやすく伝えようという苦心がうかがえる力作である。

評者*中島まゆみ



一汁一菜でよい という提案

土井善晴著
グラフィック社
本体1500円+税

ライターとして「普通においしい」という日本語を使つてよいものか迷つていた、この本に出合うまでは。テレビ番組でおなじみの料理研究家は、その表現でしか伝えられない味があると肯定する。

「ごはんや味噌汁(中略)のような、身体に良いと言われる日常の食べ物にはインパクトがない(中略)普通のおいしさとは暮らしの安全につながる静かな味です」その思想が行きつく先が書名の「一汁一菜」。すなわちごはん+みそ汁、漬物の食事がよいという提案だ。「家庭料理は命を育む」という信念が、随所にあふれている。著者がありもので作つた、数々の私的なみそ汁の写真は一見の価値あり。毎日の煩雑な食事づくりの見方を変えてくれる良書だ。

評者*松浦ネイル



零戦パイロット からの遺言 原田要が空から 見た戦争

半田滋著
講談社
本体1200円+税

回想録でありながら、「今」を語るのが本書だ。「(中国人は)逃げて物陰に隠れるのですが、上空からは丸見えます。私は機銃を撃つて一か所に逃げ込ませておき、その真上から六十キロ爆弾を落としました」空にいる原田氏に「大量に人の命を奪っている」意識はない。屍も負傷者も彼の目には入らないからだ。しかし、真珠湾攻撃の頃から、彼は自国の戦争に疑問を抱くようになる。

墜落で海に投げ出された後、奇跡的に自軍の空母に助けられた原田氏は、甲板に倒れている瀕死の兵士を差し置いて、治療を受けた。まだ戦える人を優先する最前線の医療の原則だ。そうした経験の数々が、戦後の彼を「戦争を憎む」語り部にしていくのであった。

評者*助田好人



デマとデモクラシー

辻元清美著
イースト新書
本体907円+税

震災時の支援物資を横流しした、自衛隊を誹謗中傷した……。政治家になつて以来、根拠のないネット上のデマに苦しんできた著者が、それに正面から反論する一冊。一つひとつのデマのあまりの「デタラメさ」に、改めて嘆息させられる。さらに、国会での安保法制の議論中には、与党からデマに基づく攻撃を受け、その対応に追われることにもなったという。そんな状況を指した「政治がデマに侵食されている」という言葉には考えさせられた。

後半には、もう一つのテーマである「デモクラシー」についての、小林よしのり氏、内田樹氏との対談も収録。特に、正反対の立ち位置とも思われそうな顔合わせの前者は刺激的で読み応えがある。

評者*西村リュ



小さな独房で生まれた、 人間社会への壮大な考察。

不謹慎な表現を許してほしい。V・E・フランクルの『夜と霧』に代表される、無辜の一市民が不条理に監禁され、極限状態で書かれた文学に名作は多い。残念ながら新作は生まれ続けている。著者のファンは韓国で政治犯として無期懲役を受刑、1985年から約13年を獄中で過ごした。本書は著者が妹へ宛てた書簡集だ。独房で面会自由なのは蚊やネズミ、そして野草だけ。シャバの私たちが見落としがちで、ちっぽけな生物を引き金に、人間社会を考察する。その思考の広がり方は壮大だ。

例えば、著者は雑草ではなく野草と呼ぶ。「地球上で、これまで知られてきた植物種(中略)約三十五万種(中略)のうち、人間が栽培して食べているものは約三千種。差し引いて、ほぼ三十四万七千種の植物を雑草だといって抹殺する、そんな愚かなことを現代の人類は試みているのです」。

野草の手紙 草たちと虫と、わたし 小さな命の対話から

ファン・デグオン著
清水由希子訳
自然食通信社
本体1700円+税

評者*呉玲奈

子ども
朝日新聞
朝日新聞
本体1300

忘れたかのように、次々に
原発再稼働に踏み出してい

敗北方
Later
鶴見俊輔
編集グル
本体2200